

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

+

金五冊曲亭主人編

大人



特別
14
600
17



南總里見八犬傳第九輯

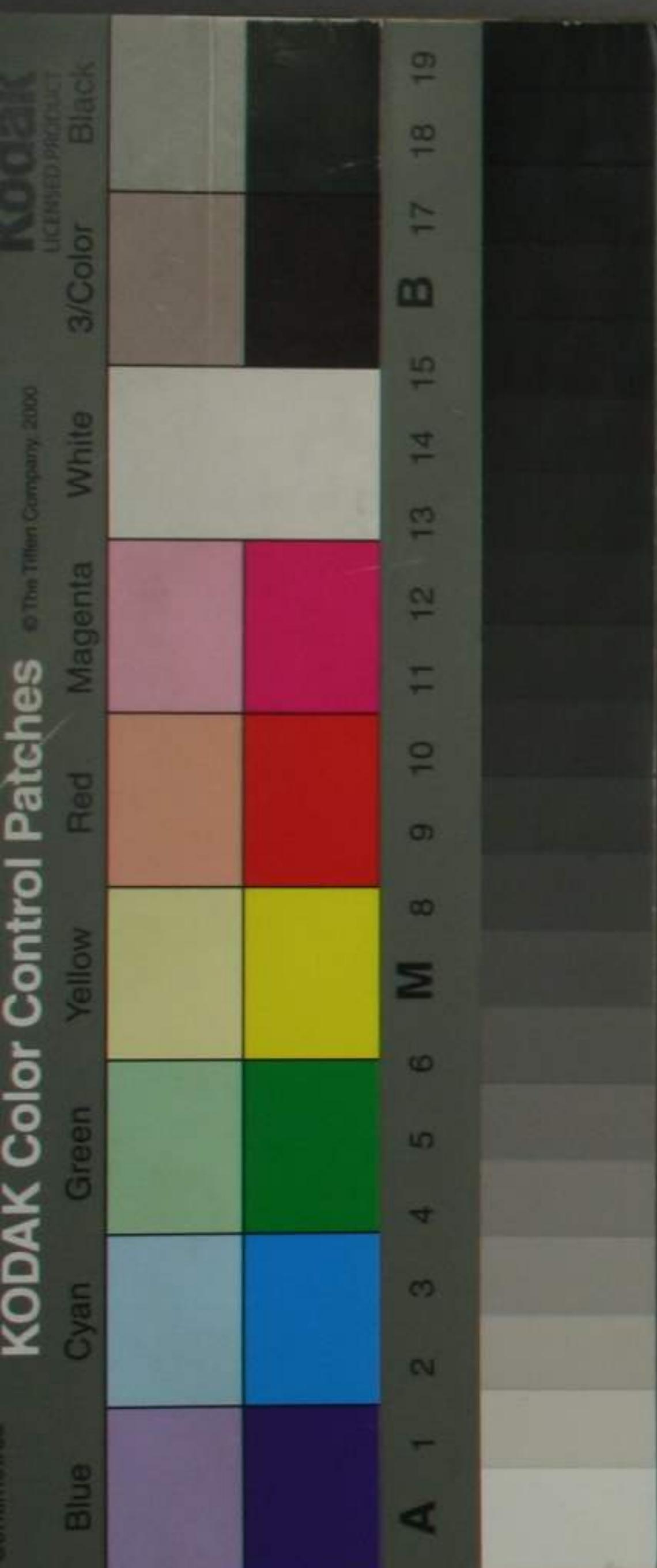
下缺下甲

二十八之卷二十九丁

表紙序言

巨工英泉

丁子至平兵衛校



金

南總里見八大傳第九輯卷之二十八

東都 曲亭主人編次

第百四十四回 澄月公一謀五虎至疆土

政元既よ余市を誅して敢其身の慾と飾まひ先帝も室町殿義の御氣色のまま徳
宮へゆきせせ恩許せらればゆく安らぐ歎く鏡りく兩三四回尋思せ候まゝ御思得
至れりが猛可よ使者て遣て京師の五虎とすまる秋條得曹廣當澄月者車
介直道坐並よ西輪馬海傳眞賢を敵齋經緯と家臣種す鳴や太正告記大鬼
兵士是年紀を立取扱ふ秋條廣當は那虎の防禦とうそ北面の兵士皆奉朝廷を
守護せしむる暇手とて招至応せど又澄月直道は昌長の大江親共侍と聞ゆる
をも竟ひも所帮助する鬼平直公未尋跡久の碑されや落馬死す重音のま体と京主

西子作。説文。筆とあわててその故に言中の沙汰に揮りて身の撲傷へ金もども。五、傷病病
假托て高屏居て。ちーからむ亦政元の相を應じる。餘す事無く經擇も正生すと
景紀。貴譲。早く參り。まつて。登一時政元對面。宣示すア。白川山。灵
虎の事の趣。附ふ。也。及。以。之。飛既。落。外。を。鷹。戸。们。を。而。課。ノ。猶。捉。ま。缺。も。他
如。の。浪。せ。の。う。前。鍊。砲。キ。武。藝。胆。勇。の。者。ま。ぐ。れ。傳。授。あ。り。す。功。干。而。主。モ。鍊。ち。ま
い。き。が。今。命。ま。よ。ひ。の。義。て。以。そ。各。鍊。砲。を。授。れ。す。列。年。五。十。若。て。從。へ。と。俱。よ。那。山。ボ。獵。狩。て
も。と。う。そ。ん。ど。か。ひ。功。す。れ。先。度。の。耶。を。雪。す。足。り。ぬ。一。と。見。て。驚。く。但。而。非。獵。者。们。へ。體。す。目。と。目。と。往。し。
答。難。よ。ろ。ひ。や。よ。直。賢。と。經。緯。權。且。と。得。よ。レ。テ。酒。設。奉。レ。等。那。虎。ハ。直。賢。物。
内。外。故。と。画。圖。の。化。よ。う。ふ。力。す。も。征。一。き。か。鄙。語。云。餅。ハ。餅。師。ス。く。山。獵。を。す
ま。高。い。お。生活。よ。と。き。獲。戸。も。林。裏。を。ま。さ。下。さ。る。所。を。お。出。を。お。出。す。守。マ。ニ。鍊。砲。を。す
そ。そ。く。又。た。ぞ。口。人。を。い。ハ。獲。戸。们。と。立。勝。く。能。を。も。鬼。火。と。讓。を。と。正。告。進。院。

もとより。眞賢、經輝も、この議を喜く共信。河原の勅稿を讀く。改元ハ聖意也。
らひども、今亦、苦勞をあらざる趣旨又理更なるを察。已とて、御を其議と爲て、余宗且若
们が詔を下して、國民を安堵する。石を以て國を廢すを敵禦。中太鬼平五十五年六月各卒
名を譲遺して河原も勤役の願人として、御正使大東ハ有司を改めて、
勅より。と命えられ、翌日是日眞賢も、經輝も共信を蒙る。是の後而立七日歷
めし。と、京師の吉良安堵も、虎の在る山を背かく。河原モ護ひハ何事で、河太郎と水虎と
ハ、虎も亦木に栖む者と、思ふ。鳥跡にて、京室の癖を、亦復是の要評を改め
る。而して、毎日をとると思ひ。耶頭人も、召返され、おも便より徳用と改め
る。も、ま、御室上院に上り。而虎の顛末を解示す。却つて、和尙のヨリ力入るを知り。今亦されば
かう。師弟の法力をも下れぬれば、是大功也。耶頭墨虎と對治く。先度の取事と雪
めを。と、徳用流等々、真義が仰かざる。望む所よし。ひがせん原内泉の跡を

らゆべ我六十分の鍊杖も撃て真甲斐あらず。少く約莫傳る变化の人力にて征せり。
一有體の法力あるこそ。儒臣僧。調伏の修法を住し。一セ日ナシト驥也。二七日
大駕見れ。三七二十一日ナシト那虎自然と滅息。上下安堵の事。何の御疑ひ有
モ。足下貌を説誅る其言亦理當。似て政元本性。修法で分かん也。又點頭。則
黒鬚も。餘々館内。乾淨也。又護摩壇を飾。せよ。而徳用堅前。行檀の效
。あつて。程ニ一七日。而歴ぬれ。も。升々。一軍。而騒。り。あ。既ニ二七日。ナシト
ま。が。居中。即刻。人を。殺。す。北自河の山里の村長故老们ハ。本復聖先の御。詣玉。那虎
今も。猶。山中。獲物。時々。食。り。里人。鄰。て。生。活。を。度。々。飢渴。交。ず。ます。對治。遼。環。也。
里上人。釋。り。書。及。べ。い。ど。と。悲。告。く。諸。よ。と。西。ニ。番。玉。及。ハ。程。ニ。東。山。嚴。も。室。町。殿。也。改。多
出。往。多。取。那虎の。身。と。尋。ひ。ひ。と。そ。齋。治。庭。隣。也。那虎。は。而。ま。昌。士。六。院。院。
を。や。こ。謹。の。六。政。元。一。句。も。答。ふ。由。キ。足。赤。白。と。退。の。六。朝。之。黑。禪。つ。を。推。築。も。思。せ。

おるする。まことに。士卒と奉ふと千日も一日の役は見えどん。程み陽正告紀内素紀。鞍馬真實を
敵齊輕緯及徳用堅削。皆我國恩顧ありぬれど。名三獻ひ命を惜みて。敢直宣を
人分ひ者。他們を慮りか。今世人へ咸相好ひ。开軍を猶も擇め。一人秀。那丈江親
兵備の和漢獨歩の勇少年。弓馬力藝千萬人。捷ひるのを。學向廣博。智
慧を量。義を見て。勇ミ一介の恩が思ふ。本性えれ。他をねぐ。試く。靈虎を
靈虎を。對治そ我與。又画を與。大功すむ。今まそ他を。漏六人。京師三人。と思
化。更を以て。胡豈ある。故反を。我弟。鳴呼銃りて悔つ。且。且。獨領く。主
張既。牢也。先他を。械を取んと。夙く。近習。又。喧囂。御藏。名馬。玉光。夫。草鎧
皆具。と。是を。庭。入させ。然而。親兵。衛。を。召せ。今程。玉。大。正。御
衛。へ。這日。政宗の。候。一。而。玉。今。使。候。と。御。何。事。す。ん。と。思。の。う。驚。な。せ。
候。と。表。を。整。と。使。と。候。と。手。代。へ。政。元。笑。す。身。邊。拵。と。手。よ。う。竹。床。

親兵衛。某をたゞ我頃者ハ公私。勤務。暇。て。懶。酒。過。る。今日。作の見參
事。食。和。歸。と。食。の。も。東。西。を。あ。れ。先。他。て。見。よ。か。ど。づ。を。庭。よ。指。ま。と。親。兵。衛。急。え。う。す。ぐ。是
則。發。四。道。入。一。箇。の。駿。馬。を。身。材。は。高。く。と。常。馬。を。優。れ。る。と。三。四。才。長。髪。麗。と。尾。と。四。足。
自。沒。と。重。み。め。其。筋。は。全。身。大。筋。而。也。當。下。政。元。又。い。事。、奉。や。親。兵。衛。那。馬。ハ。近。日。
御。劍。内。門。前。香。君。劍。降。ち。忽。然。と。牛。羊。は。是。益。世。の。駿。馬。也。我。是。を。獲。て。う。走。慨。と。命
之。鐘。後。を。宋。是。千。里。の。駿。馬。あ。ん。て。是。と。酒。と。慶。什。麼。意。よ。稱。と。い。ひ。と。親。兵。
備。遠。く。席。を。避。け。額。を。衝。く。手。を。辱。れ。ん。御。賜。あ。の。馬。也。相。皆。具。と。空。す。又。は
ひ。千。里。未。及。是。も。と。疑。ひ。そ。且。那。も。色。か。奇。妙。か。く。実。す。是。大。驚。海。洋。と。走。白。帆。
佩。と。ゆ。く。御。名。子。と。ひ。の。印。ハ。第。詮。自。性。亦。如。之。昔。唐。山。三。國。の。時。魏。の。曹。真。
騎。馬。を。驚。帆。と。驚。け。今。酒。と。見。そ。く。外。輪。驚。帆。と。走。帆。と。和。漢。暗。合。愈。
寄。人。愁。て。今。在。下。よ。取。や。し。一。期。の。事。ひ。有。ま。き。泰。江。達。往。下。と。々。喜。ひ。氣。

色も見れと政元倒る訴つて。又親兵衛我兵和扇を覆るの故に。萬比う。故番とぞ。
名刀家。花姫。衣袴夜衣。金銀調度の類。せふ。稀きと。與へ。玉座も。玉堂也。乳色也。
其物毎。圓等。れよ。那馬。さゆ。愛悦びて。受へ。甚る喜び也。と詰。が親兵衛然。
其脚錆ひハ理り。在下。東籬。一時。先老侯。顯身。青海波。名馬。
雨开。千里の駆足。を。喜む。馬と相称す。且。日月。海波。走慨。妙對。萬物。奇
乎。御。名。名。猶。宜。此の。事。在下。這。上京。浪速。浦。木路。ま。丸。
日。海波。と。年。や。う。思ひ。名。千里の。駆。馬。を。駆。喜び。別。身。あ。を。今。す。
兎。身。の。暇。駆。安。房。へ。墨。折。あ。は。走。腕。よ。か。舞。す。千里の。轍。る。一日。
稻村。城。到。る。と思。へ。舞。ひ。す。愛。奉。り。自。餘。貨。あ。う。る。黒。裏。壁。
う。ひ。ど。う。政。主。を。笑。ト。今。市。特。く。思。い。却。已。底。至。あ。され。然。氣。う。ん。面。色。天。
晴。走。信。傳。の。東西所。要。ト。ち。泰。觀。赤。本。意。上。稱。ア。珍。重。之。而。又。説。ア。傳。ヨ。本。

卷之三

子房不貞後虎嘗江を渡りて在りて至るを云。改宗竹又劉琨弘農の守
ち一時異政あり。其地の暴秦虎皆にて驅逐。而を廢して去り。是を正
史に載す。所云。言ふあらかじめ。又孔子家語云。孔子泰山を過ぎて帰る。人問
外の事。其故を問へ。對て曰。是男と女と及異焉。虎は嘵れ。是虎也。他御る。去る。否と
是方からき。政免をば。孔子是と笑ひ。蓋し。政は虎らむ。猛も。然
ぞ故車も少ひ。是政ハ即正く。みの身。敏ニ正しけ。今せざれ。民咸従之。國を治め。素て
そは天下の事。是も又平々たるもの。只是政の好テ。是。賢相を認。迄。數を重ね。と。明
君。而。輔佐たり。白川上。官舉虎。力。患。ひと。做。を。足。が。し。と。憚。暴。勢。も。さく。蘇。と。是。元。有
哩嘆。ス。て。然。ば。と。よ。其。政。は。な。テ。ハ。猶。よ。嗟。く。者。の。う。と。少。い。か。ど。形。ハ。寇。を。自。負。て。無。能。を。廢。れ。制
能。能。箱。を。箱。を。植。る。亦。何。を。異。ま。だ。余。る。迂。遠。人。輩。と。せ。よ。脣。近。る。林。の。木。と。樹。を。廢。れ。制
術。又。レ。キ。ノ。極。は。事。を。先。ち。ゆ。モ。そ。一。善。を。よ。做。を。も。先。が。真。精。先。天。地。よ。一。事。

詞は廻事よりと親兵衛某が便宜を活用して折衝と答へ在下淹御候
既に義昌の歸りて一介の功を以て思ひがれ。那虎要治の銀命は是本來の面目に
まひやうを盡す事あつて因賞の願一念を歸東の時と雖云べど政を改め更モ和房の情願
然事と爲ふ人のも多虎穢て前後我這裏ひし舞はば則是吉田家の忠臣益せば重き也
義対の國郡と移す事アハ便。將軍家はも東遷すもと眞実をも禁ひ親
兵衛様又は。御意を厚くお望み。近まきをぞ尊ぶべし。都下の武勇士諸君
筆信各身と空くして來るをもひた靈虎對治の末命は往ひまづ富安利善
為をも。是故に歸東の院と驛へと西行す。然るて駕へたゞて奇留と改
名を族首と捕らえよ。其義代ハ御免を蒙る。在下軍板少司と爲て那山。永續
る。不景氣。虎も墨も。日て壁て鍵て天の。に密々と山と下り。那山すやみだ
又まひやうを虎も墨も。我力及ばず。命と其目喪。世の胡と寒。トヘの。乞す危

卷之三

他之市願若在其功而證據分明則告諭許過其關隘而歸東也奏功
未分明非見所敷虎雖云欲出關門敢勿許進止宜從此旨一文明十
五年十一月日示奉上
年疇役奉蓬陵大津四所閩守等左京北院事



らそへまし。且親兵備候て粗疏す。小鳥銃丁を要緊候。鎗砲二挺を忘る。計はれども、堅削満面もむれども、現既落成。軍師の宋配都と隨意がとや先き御の趣を告ぐ。相計はりねども、徳用再議及モ又遠侍立出で。青月侍と有司を告て。堅前進。事より轉す。衆々宿所へ轍す。詰命面頭ひ。又室町村軍師の外様の家臣。澄月香車。介直に追ひ。裏を度領政の轍す。六代大江親兵衛と閻信の後を被り。のこぎ。剣。熙年五景紀。伝の投石と模し。額を傷れ。馬を折。筋体を傷とと氣と人。知れ。世の胡唐ふうり。將軍家の聞。見。且一と。豚糞の詠詩を曰く。伏え。其の燈籠の愈。愈。よ。猶痴舌。假だ。下く。出だ。もゆる。又。一層の愈風聲あり。糞。直道の官領。ヨ。御見。門檻。通す。折其木。腰車。參定。黒と。御免許と。宣示。そん。守馬の。別姓。と。黒。腰車。更か助主の。あい。側杖。打。手。腰。阿念。も修。自殺も。死。まとう。晝居。ら。他が取。と。眞。御。延。程。上。か。改。舊。二百貫と。最。身の。と。

いた。まことに。おれは。おまえの。おまえの。おまえの。おまえの。
師弟の義と仗て。但し。百景を分ふと思ふ。那里に赴ひ。流きり。車の。富否。見よ。我
計。東洋の。其折和殿を。河原の守全。起ひ。る。寧謙。愁を復え。さへ。きいな。
が。氣を。ぬ。○。いつま。○。いつま。○。いつま。○。いつま。○。いつま。○。いつま。
空氣。鳴き。密議。七個の。事。送。面と。往。の。心。難。開。中。嘔。風。九郎。千里。
眼。と。無。做。○。懦。雄の。壯。伎。あ。卒。然。と。復。奮。御。遠。根。の。車。の。趣。尋。そ。す。う。た。
あ。い。れ。我。们。不。似。ふ。と。も。傳。の。時。つ。お。ア。已。頭。の。蜂。吹。く。か。ニ。や。御。教。諭。従。ん。や。と。宣。趣。
神。出。鬼。没。の。良。策。よ。い。て。お。お。父。朝。臨。ま。我。们。七。名。助。劍。句。諭。よ。だ。こ。多。安。
名。と。詞。雄。を。も。慰。れ。自。餘。五。個。の。事。す。咸。這。休。氣。勵。され。但。は。神。木。と。要。誓。做。
之。赤。べ。と。示。そ。と。直。道。每。き。を。教。ひ。る。魯。公。事。と。義。と。正。事。要。全。十。事。を。全。取。と。耳。
九。郎。ち。よ。逃。寒。け。余。裕。順。風。耳。九。郎。千里。眼。八。仰。セ。各。ハ。皆。河。よ。道。方。き。處。の。月。本。
赴。は。く。隊。三。を。そ。う。ア。六。達。さ。を。昇。く。寶。茂。河。屋。正。吉。累。氣。真。賢。經。韓。う。の。守。屋。正。
竹。へ。す。參。拜。ひ。の。四。館。所。一。所。の。靈。主。每。日。の。風。聲。耳。ま。所。で。駿。相。と。大。き。事。を。頂。む。

とひ。おもひ。まこと。いはく。まこと。いはく。
うら取水人。合へ。皆共。相よ。談をや。昨今。這頭の風。難事か。知れ。往日。北白川。ま。一
夢。あ。うま。を。あ。めま。と。其枕上。ま。ま。生ま。や。死。某の日の。夢。脣。上。賀茂。阿。を。え。度す。
權。且。京。遊。ま。夢。を。あ。み。よ。我。河。を。度。させ。と。那。河原。と。相成る。紀。外。鬼。手。五。暴。紀。
エ。壇。中。太。正。告。諸。雀。海。行。真。醫。を。獻。齋。同。經。釋。年。朱。官。領。政。元。の。因。顧。と。貿。て。
心。靈。と。説。氣。そ。使。不。良。の。わ。ひ。極。て。ヨ。ア。ヌ。利。又。其。隊。を。遣。人。縣。其。們。も。發。セ。終。一
酒。を。食。り。每。官。領。の。權。威。と。偕。テ。吏。の。蟲。ひ。と。敵。じ。の。二。個。も。研。人。る。と。キ。政。改。謀。采。
あ。ふ。よ。台。駕。え。歸。ひ。の。ゆ。ま。那。河。と。渡。る。日。東。人。難。無。漏。者。う。度。金。こ。や。も。船。を。江。達。本。日。曉。春。と。那。里。と。行。す。
見。よ。か。と。よ。終。と。思。か。驚。就。覺。け。し。よ。か。と。よ。か。一人。ひ。こ。き。と。一。村。か。恩。道。を。與。一。人。せ。し。

長説譲り時て殺され誰か免る者有んや繁とて此を立キアハ勤役とす用事有
罪是の亦免れきが所證観音寺の城より起ひ六角家。又降参る是より外は
猶ハ幸いと云ふ大家有理と悟つゝ俱は逃走度を做モ程々比睿山下風時々と風と
音一吾勢ひ河原の沙石吹き颶て黑白の羽もすすふ。鞍馬山に散馬驚て虎嘯け
風音もとよ古語り是より那屋奉虎毛手と逃げしと嘆嗟ひく。眉山は給て皆共傷
近江路を越て走り。今立六年五月廿四日。西山は没んとそ登立時鞍
馬真賢の跡と謂れ。殿兵の小頭人。北洲千里介と喰做ニ兵あり猛々與共て喰
はれ。大家多ひ讀む。我信傳。城ヶ籠連立て觀音寺の城より起くと。廢帝ハ首
を起て蛇口にて一保の兵士。而取戰飯。とせられ。又客れか。筆何先。其
實久歎地。いえうる。の日鬪争。之を慘刻く罰。使ひる。四個の頭人。て説て。身を守
候。先面。名早。京へ走り。館。訴。宣示。今。小可。頭人。裡。此中。志。無。鬼。事。

七個の金子すへ情地。白川の方よりかうます直道。舞はす御州東の流言。既にれり。
賀茂河原を勤務の士卒のうち。是を知る。日毎。河邊を立盡め。西隊の兵士。
今日八百。想。怪と顔色を聚り。相見ひ。まづ。憤の久く。他們ハ逐電も居
ゐ。早く準備と整へ。寄せる。と。度め。直道。詠じて。再説。及ば。奴婢。云々と
語。留守せ。年少。然而進宿の鐘餚。と。年少。兩個の弟。よみ難え。きよ。の曉。昏。宿所
を。賀茂河原へ赴け。余程。と。晝。中太正告。紀内鬼平五景記。鳥海告。貞
賢。敵齋。短絆。と。風。虎。防禦。と。寒。と。河原の勤務を詠。一。ち。各。の隊。無事。
ひが。所。阿原。立。做。と。幸。の。日。と。過。と。程。と。有一時。勁風。沙石。と。颶。て。天。と。鳥。く。空。里。
共。く。ふ。育。の。立。と。風。天。を。齊。て。後。見。れ。都。て。阿原。立。と。霧。兵。一人。も。休。ぞ。詠。
皆。且。と。風。天。を。齊。て。後。見。れ。都。て。阿原。立。と。霧。兵。一人。も。休。ぞ。詠。
各。の。金。子。面。三。名。の。役。と。從。と。あ。よ。と。吟。歌。疾。那。奴。幻。と。狂。意。と。是非。と。を。詠。
翠。來。と。と。左。部。と。右。部。と。考。セ。ユ。既。暮。春。と。え。ど。か。う。む。花。吹。ま。す。と。詠。景。紀。直。書。

卷之三



アシカ
アシカ
アシカ
アシカ
アシカ



アシカ
アシカ
アシカ
アシカ

と。とくに徳川聖訓の謀へ合ひれり。すこし奥どろの隠の場所が柱子傍れ真面目に
腰を拂ふ六株とも無く腰掛き言直道へ船を多く置て定む。猶是紀三原にて、當
下景紀頭を掉す。直道主は、至る處にえ蓋を食す。ところ星月を冠ゆうすんと震
事何せん縦命を合ひしよ。這直道の至る所に、因縁を直道達せして、かく和泉の望を傳
きの事。計の事。かくの事。かくの事。かくの事。かくの事。かくの事。かくの事。
合戦の合戦を隙を直て死地と駆け落とす血相立を少しどけ。經緯是の驕ひ懐て、かく直道
をかま。狼藉をまと喰せよ。粗末を找出を直道達する。衆御坐り聚れ。烈火炎々輒に經緯を疾
貫正告真賢。驚ひ質てさき何事を。正告は身を刀を抜肉をり經緯直道を尋ねし。
程もあをも直道の兩個の弟子推測す。丁々破と熟経へ正告と自失賢へ遂よ直道の弟子と
あれど。正告は、經緯と相與て、澄月を嘗みと競ひけり。既に直道の三個の敵を殺
されど。所作。度々經緯と相與て、澄月を嘗みと競ひけり。既に直道の三個の敵を殺
されど。景國所の深癡を覺ふ程より外画を張する直道の助劍五名千里眼八腹風耳九
耳。景國所の深癡を覺ふ程より外画を張する直道の助劍五名千里眼八腹風耳九

五頭を献ぐに衆研奔散頭乞喪

第百四五回

第百四十五回 脚小至極にて恩師徒を足を踏む
五頭を斬り衆歼奔敗頭を喪ふ

却説蘆洲千童作三面制者師平ハ二十個の夥衆を帮助とす頭人並ニ澄月師弟を失
場ニ銃砲ヲ繩引キ遠近撃。梢動く折る處。候。軍一百六十八十疋。六七心許。各
走て情地よかずまゝわらへ千童作則他們に向ひて方儀。四個の頭人と豫面善。○る旨
車介師弟五七名と一斷殺。又。勝負つまどり。折我們あはまよけ。相手
便宜ある。身。脅び寄つて前後より二十挺の火砲。更一度木結果付。より云奉。
趣て告て又はる。ノ立馬の。達月香車介直道ハ何等の故。其、矢子六七名と
併せて四個の頭人並。騎射。馬を敵齋ちと命。禍事。を做出し。もや惜由セ知り。う
れぬ。也。この。いへい。共侶。共侶。繫。捕。け。妙。う。ど。や。今。達主客の首。死。伏。と。復
を。失。ぬ。也。達師弟五七共侶。繫。捕。け。妙。う。ど。や。今。達主客の首。死。伏。と。復
館へ。坐。ま。事。既。よ。懇。向。寺。如。正。事。景。紀。真。賢。經。釋。講。度。モ。蘆

月香車介直道の一味の弟子六名にて従ふ。今宵情地守屋より但と觀音
寺の城へ走らるを催促守屋及ひを可無相謀て真幸を鎌砲をもて送り而捕り候と想
前幕より首尾相稱す。御藏八入を増もへん。有司と賃一回れ人折ひを食せよ。
居るをとす。大家銳ひ意。とくに設宣は精物。然が先頭人等の首領。樓層大
ゆそのべと。情動る。大家の社役五七名内より程々衆立見。このをとくつ
草。何原を左右へ走る四個の頸人の弟子十名許立見。尋遇。後へ途
あきじて一猪の腰を守屋へかすまよけぬ。身向す夥兵。仰の居ます立在を
まよ見て。腹立つ。同音高く若们衆。那里へゆく。我們既ト往事
を知るや鳥鷺の白徒奴。と相鳴りて近着程々千里作五郎平亮も雪を
早く丈家の兵。毎日裏垣を引堤。鎌砲拿も直ち肩負ひ。二
十五挺。一度ご鐘と鐘を發せば又誰へい第。防ぐ暇のぞ。果敢々都

休

優

奪ひ付れて血夏はを衝き廻るも。まつて、つるみ。のちへとて、元。見。まわらひ
身。アリ。遠を擊す果。そ外の城室を知る者あれば。復。易。急。し。計。謀。
正。士。奉。の。生。本。公。告。五。個。の。頭。人の。首。級。を。推。方。金。館。へ。歸。功。を。奏。君。一。百。名。
三。田。利。と。共。み。み。加。子。住。か。く。ま。餘。を。哨。と。保。エ。リ。と。空。を。キ。師。平。指。禁。免。
否。と。上。要。さ。れ。守。屋。よ。在。か。く。倘。那。虎。の。ま。ぬ。よ。達。を。免。さ。る。有。か。く。ん。然。今。
日。音。轍。ハ。皆。平。等。の。揮。だ。る。よ。全。て。復。方。名。く。あ。れ。皆。共。信。す。や。け。せ。等。
大。衆。熱。き。と。而。て。今。重。に。路。絶。す。從。ひ。が。千。軍。作。只。得。那。虎。の。信。す。隨。即。正。告。
景。宗。範。直。賢。矢。揮。直。道。の。首。級。を。捕。相。撲。す。吾。師。平。と。共。信。ふ。二。百。個。大。
家。を。ね。す。西。草。の。館。へ。赴。く。程。よ。復。方。よ。遠。河。原。る。傍。守。屋。の。小。頭。人。薄。瀬。洲。千。軍。作。
三。田。利。吾。師。平。大。家。の。小。軍。兩。名。す。り。四。個。の。頭。人。正。告。景。紀。直。賢。有。擇。の。假。
避。て。火。言。の。詫。あ。り。主。君。政。元。の。下。を。寝。て。音。幻。を。緝。捕。の。一。幕。野。見。鳥。真。名。五。

嘔。做。と。兵。

師。後。保。士。卒。四。五。百。名。と。領。て。馬。で。そ。や。り。ま。け。る。槍。を。途。ナ。筋。會。主。
久。則。千。軍。作。吾。師。平。ハ。事。集。と。伴。吉。ト。四。個。の。頭。人。と。直。道。の。首。級。を。美。
擴。ふ。盛。ア。ク。真。若。五。郎。殺。ハ。底。セ。有。使。れ。ハ。三。田。利。吾。師。平。宣。陳。五。室。相。保。エ。星。
西。陣。ハ。參。う。坐。ま。フ。マ。槍。捕。ま。ル。近。徒。五。名。の。首。級。を。脚。贋。は。案。ヘ。又。薄。瀬。
ち。ヘ。モ。ト。先。つ。こと。未。タ。ハ。二。三。十。石。ハ。這。里。カ。我。ハ。僅。カ。安。守。の。鳥。山。河。原。ハ。櫻。取。近。徒。伏。誅。
ま。れ。ど。シ。日。キ。の。寄。心。許。す。河。原。へ。赴。て。宿。非。常。を。參。ま。ル。あ。い。ま。と。
宣。示。景。大。衆。裏。謀。自。き。某。る。五。師。平。ハ。其。原。ア。星。百。卒。十。名。と。共。保。エ。件。首。級。と。
應。く。別。れ。ハ。西。陣。の。脚。ヘ。赴。て。宿。五。郎。後。條。ハ。五。郎。終。士。第。ハ。宿。す。と。
り。立。れ。ハ。賀。茂。河。原。す。種。子。嶋。中。本。正。吉。の。守。屋。す。ま。先。を。定。三。
十六。と。か。じ。る。と。御。尾。筋。を。引。起。て。モ。槍。ま。ル。ア。ラ。皆。鍼。傷。の。こ。よ。と。各。相。戰。く。ア。

先とあがた刀槍那身を三度も重は是尙取説だ。主邊事人する直臣助の事の
内中一個の北伐でよき義兵。僕息子とて良名五郎。陸郎。一五郎。下士とての爲り
莫加。准備是れと並り。又外面に數れ。正告真賀。經禪。景紀。の
武藝。攻防。手毎の元體を極まる。皆鎧傷あれど一人股を盡らひ。是
處所をねらひ。折子我と復び。車の仔細を訴ふ。便りを附す。當時夏令房が這
傷瘡患と守屋で被入れさせ。走る難事も非候と。但し勦り難く。往々其
美帽を折尋ね。守屋を和牛の番車。介直道へ。鎧法の第。品模。赤
四郎と喰做者へ。則此。招了か。直道。景紀。役石の遠恨ある。遂に流
せ。計の算計。行ひ。既す。乃の便宜と。今宵。腹心。八弟子。順風耳九郎
千里眼。八葉。亦。嘗て。や。近里。そ謀く。景紀。寺鬼。短縛。夜を。見。ま
ま。正告。百丈。警。等と大歎。突戦。邊。誰とも知らず前後うち連發。而。鎧

砲。敵。身方。各自。繋られ。其信。倒化。あ。獲の事と。知。又。外面。在す。
傷瘡患。ハ。程子鳴。正。某。鎧砲。不。何原。の。勤。獲。不。從事。下。汎。キ。ナ
是。人。之。社。侯。の。口。狀。あ。ノ。罪。兵。竹。虎。の。云。風。聲。耳。相。女。猶。ノ。風。震
起。一。時。皆。患。逐。害。あ。リ。又。仇。太。郎。御。門。御。師。命。ニ。左。右。別。他。い。無。見。是
及。す。れ。が。日。夏。有。て。ア。未。新。反。て。罪。兵。竹。虎。在。周。給。レ。火。十。枚。鎧。砲。
連。參。考。す。仇。太。郎。御。達。力。轉。付。一。ケ。事。の。顛。末。五。正。告。景。紀。真。賀。經。禪。有。す。
主。先。通。心。負。う。知。れ。一。ケ。事。の。顛。末。五。正。告。景。紀。真。賀。經。禪。有。す。
其。脅。病。あ。て。逃。言。罪。と。曉。爲。頭。人。を。誣。る。謀。殺。と。許。て。更。エ。便。宣。主。ま。す。
是。と。擊。殺。一。件。其。身。の。忠。義。と。モ。罪。殺。近。ニ。異。キ。モ。一。個。の。漏。シ。補。捕。見。と。慶
矣。每。下。知。る。程。五。千。重。作。吉。師。平。サ。ハ。也。義。と。歸。主。之。驚。恐。ス。共。保。不。逃。立。ま
ま。ソ。詳。見。鳥。の。子。卒。二。音。名。連。參。大。推。捕。主。不。歐。御。去。數。珠。繫。九。漏。古。童。

日 月 一
新 故 云 風

心事あらぬ出家入道。一個へ北嶽城を觀音の堂守ふ僧。世を終り。一個へ
日毎よ路傍よ生く。佛經をこもる子才。一矢一錢の施をねぐ。其の半生を送り。老死
もの比五山の一僧の狂句。大蟲已起。何留天狹。猛虎在山。可笑。丘。無聲外
ま。守政可恵。兆民唯。參虎不空。人人反相呴。又政入部千慮必無
功。陰月一謀。殘五風。かづりけ。天下一句。三國志演義。秀向。さへ抑。之。畿富。京
師。ふつぶつ。五虎の稱。とほり。紙筆。彦。第一。と。今。ま。廣富。
素。是。溫煥の君。す。じよ。勝。石。仇。と。暗。む。那。人。行。同。下。ま。は。被。妻。破。廢。の。田。地。主
翁。造化。日。さ。は。鬼。手。上。景。氣。す。元。一。時。人。舊。國。而。病。是。す。も。五。虎。と。よ。る。
益。廣。富。の。骨。立。一。五。歲。禪。主。處。す。ハ。尾。碑。の。中。名。尼。玉。み。ん。と。ひ。め。都。ひ。し。か。く。骨。
發。の。語。危。を。五。虎。の。敵。と。撲。ぶ。吾。よ。を。よ。備。と。せ。ざ。と。是。ち。下。い。看。て。文。
大。江。無。無。六。衛。が。虎。獄。の。與。て。白。川。山。起。と。云。當。日。の。段。お。更。復。と。見。べ。同。話。休。題。

余程よ恩信徳用ハ既ニ堅前ニ械密を殺サモ他ニ出一處なる當晚便宜と頃す。
稍遠の早ニテ候館の申立事あや反動の近習青侍ノ睡らる者多れトハシニ
辭情ナキ。雪の雁の臥鳥方々西廻の安房。宿直にて在り徳用丸を覗ム。次
は。向う情ちよ隠す其里より。ひそかに。舞す。古。を。兩個の女房も子も。無聲
あふ。乍レ。徳用。あれハ。氣。を。一個の。子。參。致。と。また。遠く。身。を。起。して。安房。至。て
至。徳用。へ。小。脣。夕方。身。を。清。ま。つ。草。帽。で。面。を。被。る。袖。も。袖。も。這。す。鳥。の。理。而。机。
元。ヒ。黒。く。髪。ハ。ク。聲。も。立。モ。仰。反。ハ。久。休。息。ハ。施。ヨ。ク。既。リ。徳。用。ハ。其。亡。嚴。を。
行。ナ。歎。ミ。又。只。一。個。の。女。房。を。喰。立。ま。と。憎。の。そ。此。と。も。亦。女。房。を。外。宵。更。
の。を。人。食。れ。ば。争。美。を。雪。の。雁。臥。し。身。邊。入。れ。り。雪。の。雁。を。見。て。聲。と。或。人。と。去。
多。モ。徳。用。迷。た。モ。机。に。お。立。く。其。備。の。布。臺。表。を。衝。セ。若。輕。て。陰。厚。接。ス。次。
解。ニ。出。て。見。る。女。房。が。雁。の。宿。室。年。食。不。暮。房。用。ひ。報。若。機。百。覆。累。ね。

事一ノ是究畢竟と其一曾ニ雪此櫃をも入れて益々又四下を見廻る人を多し。筆の木
緒の長く餘さる。を窓側。先づ梅の風で如隨即是と研合す。達磨
ハシ背子聖タ。案内和子銀髮の雨落と外。度ニ出で。聖前約來す。筆體の邊に
寫入。他に既存する。今者余は意の暗器。小至。拾す。於れが入聖前。もとを
内へ投函。よき。か。知せり。至時。德用の聖す。般若櫃をも下す。長く餘分
の太諸を。松の枝葉。稍追。先登。身も亦松の枝葉。登り。徐々櫃を
さす。下。堅前。ひく。まち。那鐵の鹿杖。渡。よ渡。近見。木。伊の櫃と。を食ふ。
舊處。退く程。徳用母。今猪の撫り。早。外因。下り。溝。腰。道。九。人。坐
ぐ。口。立。手。捕。大。堅前。貞友。異。鹿。被。奉。良。慶。之。訓。化。木。
代。件。櫛。持。行。堅前。錠。破。行。高。説。之。勝。附。兩。寔。介。先。後。考。昇。之。考。根。
二十。あり。月。生。路。明。け。以。追。際。と。曉。て。回。モ。寧。三。端。を。恐。心。考。聖。便。

春。早。賀。茂。河。天。橋。を。う。渡。し。ま。の。茂。林。の。邊。を。過。程。西。行。法。師。蓮。開。り。
柳。蔭。の。另。風。三。葉。聲。を。幸。聽。ん。と。手。櫛。三。脚。卸。て。清。水。を。寒。い。手。を。洗。む。今
宵。の。首。尾。て。生。る。と。徳。用。の。雪。吹。櫛。と。這。般。若。櫛。と。櫛。筆。と。高。説。之。勝。附。兩。寔。介。先。後。考。昇。之。考。根。
説。休。堅。前。が。久。す。而。坐。ち。ハ。御。向。ニ。河。原。ゆ。坐。今。よ。起。至。那。四。個。の。頭。今。多。く。
大。江。坂。を。與。捕。究。師。父。の。密。談。す。傍。す。と。皆。數。だ。異。護。か。と。就。申。種。玉。試。鑑。す。
折。親。先。備。と。擊。果。と。と。詳。20。秋。保。廣。當。金。同。意。と。思。候。か。我。試。と。不。と。敢。許。
矣。ひ。言。を。精。り。と。和。室。計。鑑。や。う。と。或。我。川。四。名。鑑。年。と。二。百。元。充。と。對。い。不。備。
は。あ。り。た。こ。と。ひ。も。す。ゆ。か。と。う。と。思。を。有。れ。ど。と。ひ。
第。の。事。か。今。宵。白。川。山。よ。曉。し。も。虎。害。が。運。が。大。は。双。二。櫛。果。え。と。對。い。不。備。
期。と。場。い。ま。と。の。輪。馬。經。印。也。敵。序。皆。共。信。の。合。笑。で。今。か。全。宵。入。園。て。少。大。
江。を。駆。捕。元。智。僧。ひ。ふ。を。師。父。傳。く。那。山。節。す。ま。ち。め。と。圓。苦。不。可。充。

と吉ゆき徳用黙頭す。然ばれ走一走守屋へゆく。那人立てぬる處にて未だ
此子堅削をあらへず。河原へ赴ひ。始且てかづまの事而徳用は吉ゆき。而
里へ赴き。守屋の老旱木と現ひ。即頭へせん羅參を被り。既に山陰の今人鬱
危。敏智もととく作呑師半が頭人们的首領を齎し。伏家の其毎其侶の
西陣へとてむだる其折廻り。夜とも堅削も徳用もまた其異妻を手ねがき寄り
是と疑ひ。原来件の頭人仰い。我をめりまん。瘡趕限とつたが。堅削。然ふと
在り。是あらへ錆砲の大索と附る山筋の小金は下へ引提て却徳用と西肩。而
ても拾る。嚴苦極を。早はく。さきに向ひ吉ぬかと知る。白川の山路通す。至る程。
御莫十町許す。と。と。在る路の傍。堅削一座の小屋。當下徳用聲を被り。
堅削。な。寒。守屋荷を置り。娘姫を登り。脚二被宣れ。要堅の。お
か。十石の。舟をうち。よ。堅削歩を住り。官足ふ。然ひ。這極。お。心主

指す。那人々と共に。徳用を獲す。其後より。わざと遅れて。ゆく。併す。是
小堂の枝根。昇居。仰ゆ。樹。一區。隠。と。瞻。化。青面堂。二大。持。施。一
包。れ。ま。ど。破。北。漏。月。老。年。於。之。ゆ。め。の。め。の。め。の。堅削。呵。と。う。笑。ひ。い。原。來。の。
本。首。半。八。月。面。金。剛。庚。申。殿。於。庚。申。年。輪。物。と。須。り。と。怪。く。か。い。金。思。羅。す。で。
ゆ。か。と。く。を。徳。用。推。禁。等。と。走。今。五。三。さ。な。ん。些。物。研。ぐ。と。高。2。真。道。准。備。と。せ。う。
宿。と。同。が。堅。削。有。有。有。咱。ち。加。薪。自。假。中。先。寔。セ。食。後。よ。ま。若。櫛。附。外。量。裏。解。
方。下。ま。南。江。と。兩。箇。の。割。龍。を。合。せ。又。徳。用。左。右。自。身。ま。令。り。を。戒。め。も。貌。病。後。小。娘。か。
櫛。と。同。が。堅。削。有。有。有。咱。ち。加。薪。自。假。中。先。寔。セ。食。後。よ。ま。若。櫛。附。外。量。裏。解。
方。の。み。み。の。櫛。と。相。一。相。又。櫛。と。櫛。と。櫛。の。有。か。よ。人。見。と。も。肩。九。共。侶。と。身。起。
ウ。櫛。と。櫛。と。太。筈。と。早。く。解。縛。て。太。筈。と。同。徳。用。兩。手。と。抬。居。半。身。推。等。推。

持る。録杖を直し、縁より剣と跳り下り。虎を迎て百も掉らし。矢聲烈しく修
煉を盡す。毎日墨書き、安息は、とて虎の進退疆りを、目。今前半在りと云ふ急正音
とて後半あり。よひ電光の足元へ、腰く。徳用が劍の上と飛越すと、兩三番蹴散ら連ま
徳用ハ眼張る。口藉取れて、両三歩、近づく程に、録杖、戛哩と反覆互を覗て
雪き戒刀で、抜へし。左の麻を、ば一マ。嗟呼。拔れて、一聲苦と叫び。果て、
既に鮮血、蘇粉の壙にて散る。是を傳。大傷少運の呻み声は、處處居る。
木地と脚を、背と接して、外に餘程よ雪ぬ脛と、夏着が、上る。暴虎の暴虐す
從。屏壁前ハ既より脚を噛み落す。死活知らずと、其と見る者なし。而して、
見る。て見る。身の神経を、傷む。傷む隨分氣絶して、黑白の糞を、撒き。下
且試直渠を、走り。御車は、親兵等、随行。折早く改め、因て、是を、候る。鬼客



家下は候。則代四事より對面を完。今日親兵備より舟かられる言達をと告げ。親兵備より
御所の執事三司。終て遠與を以て代官郎の歎へ受そ。隨即紀二六と奉旨候。侍郎
用に見よ。背面を示す。細書のり。みまことの黒谷か。會事。左京の需生。右
山の山名。靈廟。廟を。薬治の爲よ。曉。昏。那里より。送。木。木猶も。又。葬。耶蘇
丹。鳥の頭。白。馬。首。の。世。店。竹。茂。還。寛。時。到。と。參。向。幸。耶。耶。神。の。貢。助。よ。
た。事。ア。ハ。既。不。京。經。又。御。手。て。徑。ヨ。坂。本。小。見。す。而。此。地。處。三。多。室。ヘ。カ。ヘ。一。大。ト。モ。要。私。御。禁。禁
山。貌。未。往。ひ。る。裏。ユ。經。一。六。メ。預。サ。モ。管。領。家。の。木。牌。を。り。俱。田。辛。峰。の。庚。を。過。又。坂
本。も。う。過。リ。風。の。邪。方。モ。我。二。待。乃。城。尚。不。考。カ。虎。過。モ。畢竟。有。キ。テ。

鎧櫃は是隨身の武具あれども、鎧ハ山路の小徑にて、預けられ
や。又鎧櫃ハ其收容一名を留めて、駕せし駕車及兵士等とて、時、宿す
可え候。とひそ紀二六書、講うひて商量早く果てし代四郎の處へ、軍兵伴當外を皆召
來、方煙親兵備備が紀二六をもつてひむこと事の類、首程様々と真事と告ぐ。有
集い、騎兵五名へその曉れよと喧嘩を得て、白川山に赴き、度限へて、箭を以て
之をもりしも、えりま、口と、まもう。つとあくよ、のさと、ゑと、ま
ス。よ、當田の七八名は、今その邸店を立たず、夜逃げて、坂本の廻の那方を留
めまちぬるの歸の車を徳さんと木屋の鎧櫃のる。及、辛崎坂本の廻と過る。
折那里の廻合が賀へ同り。道様をよろべよと、詳説、祥芳管黒奴謙無
異議。さる處で、やうる難く共侶かひやう。我們ハ下司丸も取合を惜むゆゑを遠莫
山の伴立ても、要するに思ひ多くが開か左手を付さん。と、之れの軍兵が鎧櫃の故より其
人を豫めん。うち我們代へてゆく。とひそ代四郎が鎧櫃を却て當分の監理を全ひて以

天保九代成主

夏六月十七日稿畢

著作堂手集

筆

福 琥 璏

大吉

利

市